

検証・浦和電車区事件の真実 要約版 8号

(No.36~40)

民主化闘争情報 [号外] 2008年8月12日 発行 日本鉄道労働組合連合会 (JR連合)

ついに7月31日、JR東日本を退職する！

6月中旬頃、Y氏(当該事件被害者)は浦和電車区I区長から、「7月から乗務するように」言われ、いったんは承諾した。しかし、「また運転すれば必ず脅される」と恐怖心が募る中で仕事を続けるうち、顔面に強烈な痛みを感じる「带状疱疹」に罹ってしまった。JR東労組浦和電車区分会の役員らに徹底して糾弾されストレスが蓄積し、さらに、7月から乗務するよう指示されたことで、精神的に追い込まれたことが原因であることは明らかだった。Y氏は、病気のため6月19日から26日まで会社を休まざるをえなくなった。

山田の脅しで退職を決意

そして、休み明けの6月27日から出勤したY氏に、退職を決意させる決定的な出来事が起きたのである。

6月末の昼休みの前後、電車区1階の男子トイレで、山田被告はY氏に「いい加減、身の振り方をもっと真剣に考えよ」などと脅かした。短時間の脅しだったが、これがきっかけで、精神的に極限状態にあったY氏の緊張の糸が切れた。会社を辞めない限り、脅され続けることは明らかであり、東労組を基軸とするJR東日本に残ることは不可能であることを悟った。「もうダメだ、もう辛抱できない」と観念したのである。

その日の仕事が終わって自宅に帰ったY氏は、両親に「会社を辞める」と打ち明けた。両親は納得できず退職に強く反対したが、Y氏の意味は固く、何時間も話し合って自分の考えを理解してもらった。そして、7月13日、ついに区長に退職を申し出たのである。

職場を去るY氏に無言の被告たち

区長は退職を翻意させようと思ったが、Y氏の意味は固く、支社に上申するとともに、7月25日にY氏の自宅を訪ね、本人および父親と面会した。Y氏は、会社には何度も助けを求めたが窮状を理解してくれなかったことから、今さら区長には何も話す気になれなかった。

7月31日、ついに、Y氏はJR東日本を退職した。退職の辞令を渡した区長が、「すみませんでした」と頭を下げたのが印象的だった。区長室から出たY氏は、大淵被告や上原被告に出会ったが、何も言われなかった。Y氏の退職に満足しているようだった。最後に、事務室で会社に関わる一切のものを返却した。Y氏は「JR東日本は二度と利用しない」と心に決めたのだった。

シリーズ第36号~第40号の経過

2001年 6月18日	病院で治療を受ける。病名は「带状疱疹」【No.36 参照】
6月27日	出勤開始したが、痛みは治まったものの、制帽をかぶることもできなかった【No.36 参照】
6月末	山田から電車区1階トイレで脅され退職を決意。両親に退職意思を伝える【No.37 参照】
7月13日	区長に退職意思を伝える【No.38 参照】
7月17日	「退職理由について」を会社に提出【No.38 参照】
7月25日	区長が自宅を訪れ、本人・父親と面会【No.39 参照】
7月31日	区長から退職辞令が伝達される。職場を去るY氏に無言の大淵・上原被告【No.39,40 参照】